

LES 13 ÉNIGMES ET LES 13 COUPABLES

2018

by Georges Simenon

目次

十三の謎と十三人の被告

十二の謎 7

十三人の被告 151

訳者あとがき 310

解説 瀬名秀明 315

十三の謎と十三人の被告

十三の謎

第一話 ジェ・セプト  
G7

僕がG7刑事——彼をこう呼ぶ理由は後で述べる——の助手として共に捜査に加わることとなった数々の事件について語る前に、二人の出会いのいきさつと、その一連の出来事が僕の心の中で長いこととびきりの謎になっていた、ということを知っておいてもらわなければならない。

一九二…… 十二月九日

その日の夜中二時近くのこと、僕はたまたまモンマルトルのナイトクラブで相席になった外国人の男と話に興じていた。男の国籍は不詳、というのも、イギリス訛りで話していたかと思うと、知らぬ間に似ても似つかぬスラブ訛りになっていたからだ。

僕たちは外に出た。見上げると凍って澄み切った美しい夜空が広がっている。二人は数百メートル歩くことで意気投合しノートルダム・ド・ロレッタ街を下って行った。だが寒さは当初思ったより厳しかった。慌ててタクシーを探したが、空車は一台もない。

サン・ジョルジュ広場でG7型のタクシーが僕たちから数メートル先に止まり、暖かそうな毛皮に身を包んだ若い女性がそそくさと降りてきた。彼女は運転手に札を渡し、釣り銭も受け取らずに立ち去った。

「お先にどうぞ」僕は彼にタクシーを指して言った。

「とんでもない！ 君から乗るべきだよ！」

「僕の家はすぐそこだから」

「そんなことは問題じゃない！ 君が先だ……」

僕が折れた。知り合ったばかりの間柄だったが僕は手を差し出した。

彼は左手を出した、何故なら彼の右手はその夜の間ずっと背広のポケットにしまわれたままだったのだから。僕が思い起こそうとしているのはその直後のことだ。

何故かというところから突然ドラマチック且つミステリアスな世界の真っ只中に身を投じていくことになるのだから。車に乗り込んだ僕は何かに突き当たった。手を伸ばしてみるとそれが人の体だということがわかった。

運転手はもうドアを閉め、車は走り出している。

僕の頭にすぐ車を止めさせるといふ考えは浮かばなかった。思いついた時にはすでに遅く、車はモンマルトルの町はずれにさしかかっていた。あの若い女も夜の酒場で飲んだ男も、すでに姿をくらましているに違いなかった。

その時の僕の心境そのままをうまく説明するのは難しい。

アバンチュールの世界に飛び込んだ興奮で両頬は燃えるように赤かったが、同時に喉は息ができない程締め付けられていた。

隣に横たわる男の体はシートから滑り落ちていた。生気のない体。窓の外を通り過ぎるカフェの灯りに照らされ、僕はその若い顔、褐色の髪、グレーのスーツを見分けることができた。

見知らぬ男の片手は血まみれで、肩を触つてみると自分の手にも赤く生暖かい液体がべっとりついた。  
いた。

唇が震えた。さんざん迷った拳句唐突に心を決めた。

(僕の部屋へ連れて行こう！)

もしも若い女性を見かけることなく、その美しい女性がこの同じタクシーから出てこなかったら、おそらく別の行先を告げていたはずだ、警察か病院か。

だがこれは尋常ではないことだと直感が告げていた。尋常でないことであつて欲しいと思つていた。男にはまだ息があつた。気絶しているだけなら、呼吸がしっかりしてくればくるほど脈もはっきり感じられるのではないだろうか。

(おい、お前！ お前は相当馬鹿な真似をしているのかもしれないんだぞ！ こんな厄介ごとをしい込むなんて！……)

そうは思いつつ、せつかくの僕のアヴァンチュールを警察に譲り渡して一介の証人になりさがる気にはなれない。

(そうか、彼を殺そうとしたのはあの女性なんだ！……)

車は僕の部屋のある通りに辿り着いた。アパルトマンから百メートルのところのカフェがまだ開いていた。

「すみませんが、百フラン札でお釣りをもらえませんか？」運転手に釣り銭があつたらどうしようとい内心冷や汗をかきながら言った。

運転手は車を降りてカフェへ向かった。僕は男の体を廊下まで運んだ。十五分後、見知らぬ男は僕

のベッドに横たわり、僕は、ほぼ間違いなく細身のナイフでつけられたのであろう小さな傷を見ていた。

(女性のナイフだろうか……。しかし気を取り戻さないな、手当てをしなければ……)

傷は浅かった。失神からなかなか目覚めないので何故だろう、きつと多量失血のせいだ。

だがそんなに出血しているのか？ 服に多少の染みがついているだけじゃないか。

(仕方ない！ 医者を呼ばないと……)

僕は部屋を出た。そして近くに住む医学部最終学年の友人のところへ走り、彼をベッドから引っぱり出した。

程なく僕は部屋のドアを開けて言った。

「ベッドの上だ……。左側の……」

だが次の瞬間目を疑った。

なぜなら僕の怪我人——今も鍵をかけて出かけたのだから僕の囚人と言ってもおかしくない彼が——消え失せていたのだ。部屋中を探してみた。部屋は言葉で言い表せないほどかき回されていた。引き出しという引き出しは開け放たれたまま、デスクの上の書類もごちゃごちゃになっており、インク壺まで手紙の束の上に倒されている。

友達は唇にいらついた微笑を浮かべて訊ねた。

「ここに大金をおいていたのか？」

「どういう意味だ？」

僕はすっかり頭に血が上っていた。自尊心はずたずたに切り裂かれた！ 本当の阿呆だ。それに加



## 作家ジュールジュ・シムノンの誕生へと繋がる楽しい連作集

瀬名秀明（作家）

### 1 はじめに

ジュールジュ・シムノン（一九〇三・一九八九）はベルギーのリエージュに生まれ、小さいころからフランス語を日常語とした作家である。パリ司法警察局長のメグレ警視シリーズを主人公とするミステリーシリーズが世界的に有名で、正編として長編七五、中短編二八、計一〇三編を残した。また『雪は汚れていた』（一九四八）など硬質長編小説（ロマン・デュール）と自ら呼ぶノンシリーズの心理小説も並行して書き、晩年は口述筆記の回想録をいくつも残した。たくさん作品が映画化、ドラマ化されている。

日本はかつてシムノンの受容大国で、メグレ警視シリーズ一〇三編すべてが邦訳されている。ただ、晩年まで熱心にシムノンの紹介に努めていた翻訳家の長島良三氏も亡くなり、近年はほとんどの作品が入手できない状態が続いていた。少しずつ時代が変わり、このようにシムノン作品の新訳が読者の手元へ届くようになったのはとても嬉しいことだ。

欧米でも状況は良い方向へと変化しているようだ。二〇一三年からペンギン・クラシックスがメグレ全長編の新英訳刊行に乗り出し、かなりの刷りを重ねるヒット企画となっている。毎月一冊、発表順の新訳刊行だ。シムノンには量産作家として知られ、初期のメグレものは毎月一冊というハイペースで新作が出ていた。その当時と同じペースで、シムノンが筆を執った順に、彼の足跡を辿るように読むことで、新しいメグレ像が見えてくる。シムノンの魅力が再発見されるきっかけとなっていることは間違いない。

今回、ここに新訳となった『十三の謎と十三人の被告』は、シムノンがペンネーム時代に週刊読みもの紙《探偵 Detective》に連載した三つのミステリー連作のうち、二作目の『十三の謎 (Les 13 énigmes)』と三作目の『十三人の被告 (Les 13 coupables)』を収めたものだ。これまで最初の連作『13の秘密 (Les 13 mystères)』は創元推理文庫で全訳が広く日本でも親しまれてきたが（ただし現在は品切れ）、続く『謎』『被告』はそれぞれ春秋社から一九三七年に『ダンケルクの悲劇』『猶太人ジリウク』として邦訳紹介されたものの、全訳ではなく各一三編のうち一二編を収録するのみで、その後は長く入手困難な状態が続いていた。

『十三人の被告』はエラリー・クイーンが〈クイーンの定員〉No.8に選出したことでも知られる。歴史的な重要性（H）、文体とプロットの独創性における質的重要性（Q）、初版の稀覯本としての希少価値（R）というクイーン独自の評価三点を満たした短編集とされた。本シリーズはこのようにクラシックミステリー探訪の観点から楽しむこともできる。一方で、シリーズすべてが容易に読めるようになったことは、執筆・発表順に読むことでシムノンの作家的成長を辿り、新しいシムノンの魅力に出会える可能性が生まれたということでもある。多彩な読み方が可能になった。

〔著者〕

ジョルジュ・シムノン

ベルギー、リエージュ生まれ。中等学校を中退後、職を転々とした末、〈リエージュ新聞〉の記者となる。1919年に処女作“*Au Pont des Arches*”を発表。パリへ移住後、幾つものペンネームを使い分けながら、大衆雑誌に数多くの小説を執筆。「怪盗レトン」(31)に始まるメグレ警視シリーズは絶大な人気を誇り、長編だけでも70作以上書かれている。66年にはアメリカ探偵作家クラブの巨匠賞を受賞。

〔訳者〕

松井百合子（まつい・ゆりこ）

法政大学在学中アテネフランセでフランス語を習得。大学卒業後、フランス、ストラスブルグ大学フランス語学科に留学。帰国後フランス系外資金融機関東京支店勤務を経て現在翻訳に従事している。

じゅうさん なぞ じゅうさんにん ひこく  
十三の謎と十三人の被告

——論創海外ミステリ 219

---

2018年10月20日 初版第1刷印刷

2018年10月30日 初版第1刷発行

著者 ジョルジュ・シムノン

訳者 松井百合子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1732-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします